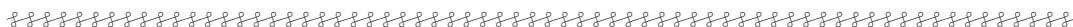


目先のことでなく

後援会会長 原 田 新 士



今年も新入生のみなさんを迎えました。

大阪電通大は、新たな分野の学部もついています。いわゆる理工系の大学ですから、学生のみなさんは小林-益川理論をご存じだと思います。

物質を構成する基本粒子であるクォークが3種類しか発見されていない時代の1972年に、全部で6種類のクォークがあると提唱した益川敏英さんが、大学の役割について述べておられます。

柿の産地で増産を目指し、柿の畑に蜂を放して受粉させ、収穫を増やした人がいたが、数年後に柿の木の力が弱くなって収穫が出来なくなりました。目先の利益を求めて根本を破壊した事例です。

また、益川さんが院生の当時は、真空管の詳細な知識を大学で教えていたが、トランジスタが登場して、知識としては役立たなくなつたと言います。

つまり、科学や学問は役立つためのものだと言っても、すぐに役に立つ知識を学び、すぐに役に立つ研究をするだけでは大学の価値がありません。また、科学技術が発展すると、経費がかかるようになるのに、実用化までますます時間がかかるようになります。

超伝導の抵抗がゼロになることを1911年に発見したのはオランダのオネスですが、この現象を量子力学で説明できるようになるま

で、40年が経過し、リニア・モーターの実験という形で実用と結びつくまでにおよそ百年かかっていますが、まだ実用化には至っていません。

研究者が本当に関心を持ち、徹底して追求したいと熱情がもてる研究を、多様な人が行っているような大学や社会でなければ、学問研究の花も咲かないと思えます。

目先の国益や流行に左右され、「実用化できる」「カネになる」「研究費がもらえる」という動機の研究ばかりではあまりに寂しい。

お互いに競争することは誤りとは思いますが、短期的な成果を競わせて、予算を配分するようなやり方は、学問とは何かを理解していない証拠でしょう。

おまけに、先進国では高等教育は無償です(アメリカと日本を例外として)。親の所得によって進学そのものが左右されるような先進国は、極めて珍しい存在です。

さらに、ユネスコの関係機関が、日本の奨学金は教育ローン化していて異常だと述べています。

日本は世界で2番目に金持ちです。その豊かな経済力を学校や学生のために使って欲しい。

そして、学生のみなさんが、すぐに役立つ技術・技能・知識というより、将来生きてくるであろう思考力、創造力をじっくり身につけてくださることを願っています。